

## 赦されて生きる

〔聖書〕 サムエル記下 12章 1～10節、13～14節

主はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンは来て、次のように語った。「二人の男がある町にいた。一人は豊かで、一人は貧しかった。豊かな男は非常に多くの羊や牛を持っていた。貧しい男は自分で買った一匹の雌の小羊のほかに／何一つ持っていなかった。彼はその小羊を養い／小羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて／彼の皿から食べ、彼の椀から飲み／彼のふところでも寝り、彼にとっては娘のようだった。ある日、豊かな男に一人の客があった。彼は訪れて来た旅人をもてなすのに／自分の羊や牛を惜しみ／貧しい男の小羊を取り上げて／自分の客に振る舞った。」ダビデはその男に激怒し、ナタンに言った。「主は生きておられる。そんなことをした男は死罪だ。小羊の償いに四倍の価を払うべきだ。そんな無慈悲なことをしたのだから。」

ナタンはダビデに向かって言った。「その男はあなただ。イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたに油を注いでイスラエルの王としたのはわたしである。わたしがあなたをサウルの手から救い出し、あなたの主君であった者の家をあなたに与え、その妻たちをあなたのふところに置き、イスラエルとユダの家をあなたに与えたのだ。不足なら、何であれ加えたであろう。なぜ主の言葉を侮り、わたしの意に背くことをしたのか。あなたはヘト人ウリヤを剣にかけ、その妻を奪って自分の妻とした。ウリヤをアンモン人の剣で殺したのはあなただ。それゆえ、剣はとこしえにあなたの家から去らないであろう。あなたがわたしを侮り、ヘト人ウリヤの妻を奪って自分の妻としたからだ。』

ダビデはナタンに言った。「わたしは主に罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。しかし、このようなことをして主を甚だしく軽んじたのだから、生まれてくるあなたの子は必ず死ぬ。」

### 〔序〕 抜き出した王ダビデが

ダビデは紀元前1000年に王となりました。彼の治世はイスラエルの歴史の中でも最も栄光に輝いた時代と言われています。軍人として抜き出した力を持ち、行政官としても優れた多くの部下の心を捉えて、適材適所に活躍させ、また策力に富み、国王として歴史に輝かしい名を残す業績を上げました。

彼はまた、優れた信仰者でもありました。旧約聖書の中で最も多くの人々から親しまれてきた書は恐らく詩編でしょう。150の詩集ですがその内の73がダビデの詩と記されています。これはそのまま信用できませんが、しかし優れた信仰の詩の多くが、これはダビデの作だと人々に言わせるほどの信仰の持ち主だったことを物語っています。

ところが、このように特別な恩寵を受けた王ダビデが、とんでもない不道德な罪を犯しているのです。そして聖書はその忌まわしい汚点を暴いてはばからないのです。私はこのようなスキャンダルに嫌悪感を覚え、説教に取り上げる気持になかなか出来ませんでした。やっとこのようなメッセージにま

とめました。未熟な点をお許し下さい。

## [1] その男はあなただ

アンモン人との戦いに全軍が出陣する中で、ダビデ王だけがエルサレムの宮殿に残っていました。ある夕暮れ、屋上を散歩していた彼は、女性が裏庭で水浴びをしているのを見しまいました。大層美しい人でした。彼は人を遣わして王宮に召し入れ、床を共にしてしまいました。大勝利に次ぐ大勝利で心が驕り、魔がさしたのでしょうか。

ところがその女性は子を宿してしまいました。彼女は使いを送り、ダビデに知らせます。彼女の妊娠が明るみにできれば、夫は戦場に出ていて留守なのですから、不倫が明らかになります。ダビデは將軍ヨアブに夫ウリヤを戦況報告のため、送り返すよう命じました。そしてウリヤから報告を聞くと、家に帰ってゆっくりくつろぐように命じました。やがて生まれる子がその時にできたウリヤの子であるかのように装い、不倫を誤魔化そうとしたのです。

しかし夫のウリヤは忠実な軍人でした。戦友たちが前線で戦っている時に自分一人、帰宅してくつろぐことなど出来ませんと、王の勧めに従わず、王宮の入り口で守衛たちと一緒にごろ寝して、家に帰りませんでした。次の日ダビデはウリヤを食事に招き、酒を飲ませた上で家に帰そうとしましたが、ウリヤの実直さは変わりません。

遂にダビデは恐ろしいことを考えました。ウリヤを激戦の最前線に出して戦死させるよう將軍ヨアブに手紙を書き、それをあろうことか、ウリヤに持たせて前線に帰したのです。こうしてウリヤは戦死し、妻バトシェバは未亡人となり、ダビデの妻の一人になりました。悪事は闇に葬られ、彼は内心ホッとしたことでしょう。

しかし「ダビデのしたことは、主の御心に適わなかった」(11:27)のです。主は預言者ナタンを彼のもとに遣わされました。王は絶対権力者です。彼の機嫌を損ねたら殺されるかも知れません。ナタンは覚悟して王の前に立ちました。彼は直ぐにはダビデの罪にふれず、何気ない世間話を切り出しました。

豊かな男が、貧しい男の大事に育てている唯一の小羊を取り上げて屠り、自分の客のもてなしをしたというのです。もともと正義感の強いダビデは、この話にすぐ反応しました。「そんなことをした男は死刑にせよ」。王の判決は絶対です。その王の前でナタンは威儀を正して厳しく宣告しました。「その男はあなただ。イスラエルの神・主はこう言われる。あなたに油を注いでイスラエルの王としたのはこのわたしである。——なぜ主の言葉を侮り、わたしの意に背くことをしたのか。」

この神の言葉に直面して、本来のダビデが生き返りました。「わたしは主に罪を犯した」。一言の言い訳もなく、神の御前に全面的に屈服したのです。その罪は情欲にまみれ、陰険で残忍なものでした。どのように厳しい裁きであろうと受けなければなりません。ダビデは率直にその覚悟を表明し

たのでした。さて、私たちならどうしたでしょうか。

ナタンはダビデに言いました。「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。しかしこのようなことをして主を甚だしく軽んじたのだから、生まれてくるあなたの子は必ず死ぬ」。恐ろしいことです。

罪の無いウリヤを殺したのですから、当然ダビデ自身も死をもって償うべきです。しかし神さまは赦されました。しかしこの大きな罪を裁き無しにするわけにはいきません。この罪によって生まれた子が死にました。生まれたばかりの子が弱り果てていく姿に、ダビデは断食し夜も地面に伏して必死に祈り続けましたが、七日目に死にました。

## [2] 姦淫の罪の恐ろしさ

片倉もとこ著「イスラームの日常世界」(岩波新書)を読みました。アラビアの女性社会に入り込んで調査研究した方です。「ムスリムは自分たち人間が弱い者であることをいさぎよく認める。したがって誘惑に負けやすくなるような状況をつくらないことにする。不特定多数の男女が肌をみせて接触していると、乱れるにきまっているから、男も女も手首・足首までの長い衣服をつける。性的誘惑に対して男はとくに弱いから、女はベールをつけて弱き男性をまどわさないように協力する。弱い人間に酒をのませると何をしでかすかわからないから、禁酒にしておけば社会の秩序は保たれ、個人も平安であると考えている」とありました。

このようなレポートを読むと、イスラームの世界は私たちが暮らしている社会よりもはるかに良い世界のように思われてきます。私達の日常世界では、女性が露骨なセクシャル・アピールを競います。どうしてそんなにまでして男心をそそろうとするのでしょうか。男は酒なしでは過せない。どうして酒をそんなに飲まなければならないのでしょうか。ムスリムの男たちは酒なしでも豊かな会話を楽しむそうです。

律法を守ることに熱心な人たちが、主イエスのところに姦淫の現場で捕らえられた女を連れてきました。「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか」(ヨハネ8:5)。「あなたたちの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい」。すると年長者から始まって一人また一人と立ち去って、皆いなくなっていました。「だれもあなたを罪に定めなかったのか」(ヨハネ8:10)。

この女性を処刑する資格のある者が、律法に一番熱心な人々の間にも一人も居なかったのです。私がおの場に居たとして、石を取らずに立ち去ったら、自分も罪を犯した者であることを言い表したことになります。「何だ。牧師のくせに」と責められ、面目丸つぶれです。だから嘘をついてでも、自分の名誉を守らなければなりません。

ところが主イエスの前からは、律法を厳格に守っている人たちが皆、立ち去ってしまいました。しか

も「年長者から始まって」とあります。長老として尊敬されている人が正直に自分もこの女性と同じですと告白したことになります。偉いなーと思いませんか。主イエスの前に立つと、自分の罪深さを率直に認めざるを得なくなるのですね。

そうです。主イエスはおっしゃいました。「あなた方も聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見るものはだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」(マタイ5:27～28)。口語訳・新改訳では「だれでも情欲を抱いて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである」と訳されています。

もしもどんな女性を見ても、男は変な気持ちになってはならないというのなら、やはりイスラームの世界のように、女性みんなに黒いベールをすっぽり被って貰わなければなりません。律法学者やファリサイ派の人々が主イエスと女を残して、皆立ち去ってしまったという光景を、私たちは心に刻みつけておかなければならないのではないのでしょうか。そして主の祈りを真剣に唱えなければなりません。「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」。

### [3] 神に対して罪を認める

ダビデの悔い改めの態度に、おやっとな違和感を覚える点があります。彼の懺悔は「私は主に罪を犯した」の一言のみで、夫ウリヤに対して、またバトシェバに対しての謝罪の表明がありません。神さまに謝りさえすれば、それで一件落着いたと思ったのでしょうか。有名な懺悔の詩、詩編51はまさにこの場面で生まれた祈りの歌とされています。(実はバビロン捕囚の民がダビデと我が身を重ね合わせた詩だそうです)

その6節に「あなたに、あなたのみになわたしは罪を犯し、御目に悪事と見られることをしました」とあります。罪を犯したとありますから、この作者も誰かをひどく傷つけたに違いありません。当然その相手への懺悔がなされるべきです。でもこの詩の作者は、自分は神さまに対してのみ罪を犯しましたと告白しているのです。

そうです。彼は神さまから指摘されて、初めて自分は、神の目に悪事と見られる罪を犯したのだと気付かされたのです。神さまから罪だと宣告される悪事、すなわち罪は神さまに対してなされたと自覚されて罪となるのです。

ですから相手を越えて先ず神さまに懺悔する。その時懺悔が本当の懺悔になるというのが聖書の信仰です。ルカ福音書の「放蕩息子のたとえ」でも、彼は家に帰って来て父に申しました。「お父さん、私は天に対しても、また貴方に対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」(ルカ 15:21)。

人間相手に自分の行いを吟味するなら、こちらにも何がしかの言い訳が出てきます。美しい女性が裏庭で水浴びしたからつい誘惑されたとか、折角戦地から呼び戻していたわっているのに、家で

くつろがず守衛所で寝るなどと片意地をはるから戦死させたとか。しかし聖なる神さまの前でとなりますと、どんな言い訳も自己弁解に過ぎず、全面的に罪を認め、懺悔する外ありません。それは人格の屈服ですから、屈辱であり苦痛の極みです。しかしその時、懺悔ははじめて真実の懺悔となるのです。

しかし神さまは聖なる神であると同時に、はるかにまさって赦しの神、愛の神です。御前に打ち砕かれて懺悔する魂に、神さまは全面的な赦しを与えて下さいます。それは本当に徹底した完全な赦しです。そして懺悔の本当の恵みをいただけるのです。私たちはこの赦しを受けた時に、生き返ります。

忌まわしい過ちから、完全に解放されるからです。それは文字通り、魂の再生です。「わたしは主に罪を犯した」と告白し懺悔した時、ダビデが得たものはこれでした。ですから醜い罪を乗り越えて、新しい人生をスタートさせることができたのでした。信仰が人を高め、強くする力はここにあるのです。

### [結] 赦されて生きる恵み

「欲望がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生む」(ヤコブ 1:15)と聖書は語ります。死を生み出す欲望を私たちは、皆持っているのです。心からの恐れを持ち、「我らを誘惑にあわせず、悪より救い出したまえ」と主の祈りを唱えつつ、一日一日を送らなければなりません。

「罪を犯さない者は一人もいません」(列王記下 8:46)とダビデの子ソロモンは祈りを捧げました。罪を犯してしまったならば、いち早く神さまに告白して、赦しを求め、悔い改めなければなりません。そのために日々の祈りを欠かせません。礼拝を大切にすることです。ダビデのように罪を厳しく指摘してくれる神さまの使いを、身近に持つことです。

罪や失敗、挫折に打ちのめされて、いつまでも立ち直れない人が多くいます。しかし神さまへの罪の告白は、完全な赦しを頂けるのです。十字架にかかりながら「父よ、彼らをお赦してください」と祈りつつ私に代わって死んで下さった救い主キリストが、執り成して下さっているからです。

ダビデはあれほどの罪を犯していながら、立ち直りました。そして最後まで生き抜いて、自分の使命を果たしました。どんな罪を犯してしまっても、信仰をもって良い生涯を生き抜くことをこそ、神さまは心から望んで居られるのです。

赦されて生きる者は、傲慢になれません。これは大きな恵みです。主イエスにならって、人の足を洗いつつ、謙遜に僕の道を歩むことができます。私たちもこのようにして、互いに愛し合って生きて参りましょう。

完